

第 11 回市史講座ミニレポート：平成 30 年 2 月 17 日（土）



「敗戦直後の松江における人びとの暮らし」

講師：鬼嶋淳先生（佐賀大学教育学部准教授）

鬼嶋先生は、第二次世界大戦後の松江の人々の暮らしを「食糧」・「住居」・「文化運動」に着目して話されました。また、ほとんど空襲がなかった松江市では、人々が体験した「戦争」には差異があるとして、地域間・戦争体験の差異に着目して説明されました。

敗戦直後の松江市では、食糧難と住宅難が深刻な問題となっていました。戦況の悪化・凶作などによる食糧不足で配給が十分に行き渡らず、大橋南詰めにヤミ市が立ち、値段の高さと日々の警察の取り締まりにも関わらず物資を求める人々で賑わいました。また、戦争末期に空襲対策を目的として住居を間引く建物疎開が行われ、市内の 4 分の 1 にあたる戸数が強制的に壊された上、戦後海外からの引揚者や戦災転入者などで、さらに住宅難が深刻化したとのことでした。

地域間・戦争体験の差異としては、松江市街地住民と生産者との間、また市街地住民間であった食糧入手の面で差異、建物疎開者の窮状、引揚者・戦災疎開者の生活環境の悪さ、また戦争未亡人と戦争孤児などを取り上げられ、新聞記事や市会議事録などから説明されました。

一方、戦後の混乱の中で、みずほ演劇研究所の公演・『山陰文学』の創刊など疎開文化人との関わりによる文化運動の高揚や、青年団の活動が活発になっていきました。

みずほ演劇研究所では、島耕二を指導者に迎えて第一回公演をし、巡業公演などで彼らに刺激を受けた農村部の青年たちが自分たちの劇団を作るようになるなど、文化運動の輪が広がっていきました。

また、各地の青年団員は、戦後 GHQ による検閲がある中で機関紙を発行し、青年らの手による国家再建や郷土文化の発展、男女同権などについて、今までにない新しい考えや意見を発信していたことなどを、先生は、ブランゲ文庫を元に解説されました。

おわりに、（１）食糧難や住宅難といった暮らしの混乱状況は、人為的な要因が大きかったこと、（２）戦後の困難は松江の人々に一様に起こったわけではないこと、（３）困難な生活状況の中で、国家再建・郷土（農村）再建を文化を通じて担おうとする青年層の存在や、彼らから新しい考えや声が発せられたこと、（４）疎開文化人による地方文化への影響があったこと、（５）占領下の検閲の問題、（６）敗戦直後の青年文化運動とその後の展開・朝鮮戦争期の変化、という６項目でまとめられ、講座は終了しました。